

論文審査の結果の要旨

氏名：三 塚 裕 介

専攻分野の名称：博士（医学）

論文題名：肝切除後のドレーン至適管理基準の検証

審査委員：（主査） 教授 石 井 敬 基

（副査） 教授 後藤田 卓 志 教授 逸 見 明 博

教授 杉 谷 雅 彦

肝切除後の腹腔内ドレーン留置の功罪は数多く報告されている。これまでに4つの無作為化比較試験が報告されているが、術後ドレーン抜去時期や抜去時に於ける廃液量、廃液内容の基準などいくつかの問題点が指摘されている。

著者らの教室では、肝切除時に腹腔内に留置したドレーン抜去を、術後3日目・ドレーン廃液内 bilirubin 値 3mg/dl 以下および感染無し（以後 3x3rule）とする基準を提示し報告してきた。今回の報告は上記報告の妥当性を検討した報告である。

3x3rule の結論に至った症例 316 例（Validation set）と今回対象とした 274 例（Test set）の患者背景、術前肝機能評価、手術術式、ドレーン管理状況（留置日数、廃液内容、感染の有無）を比較検討した。その上で対象症例（Test set 274 例：腹腔内留置ドレーン 493 本）の術後ドレーン管理を 3x3rule で行い、感染率、合併症率（Clavien-Dindo 分類を使用）、術後在院日数、医療コストをそれぞれ検討した。その結果、感染率は Test set で有意に改善された。さらに、術前肝機能評価が有意に低い Validation set においても 3x3rule で管理を行った症例は感染率が有意に低値であることを示した。さらに、合併症率、術後在院日数、医療コストにおいても Test set で有意に改善を認めた。

肝切除後の腹腔内ドレーン留置は術後出血や胆汁漏の有無を知る上で重要である一方、ドレーン留置起因する感染や術後在院日数の長期化を考慮すると管理には最大限注意を払うべきべきである。今回の報告は肝切除時に挿入した腹腔内ドレーン抜去の基準を、術後3日目・ドレーン廃液内 bilirubin 値 3mg/dl 以下および感染無しとする基準（3x3rule）の妥当性を検討した最初の報告である。

本論文はすでに World Journal of Sur.(2016 40;9:2213-20)に掲載されていることを追記いたします。

よって本論文は博士（医学）の学位を授与されるに値するものと認める。

以 上

平成 年 月 日